

第178回 日文研フォーラム



アジアにおけるメディア文化の交通

中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって

Media Communication in Asia
Japanese TV Dramas in the Eyes of Chinese University Students



呉 咏梅
WU Yongmei

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話ができるように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ

● テーマ ●

アジアにおけるメディア文化の交通

中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって

Media Communication in Asia
Japanese TV Dramas in the Eyes of Chinese University Students

● 発表者 ●

呉 咏梅
WU Yongmei

北京日本学研究中心 センター 専任講師
Lecturer, Beijing Center for Japanese Studies
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2005年3月8日 (火)

発表者紹介

呉 咏梅

WU Yongmei

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略歴

- 1991年7月 北京外国語学院日本語学部卒業 B.A.
- 1994年3月 北京日本学研究中心大学院修士課程修了 M.A.
- 1994年4月 北京日本学研究中心 助手
- 2000年10月 北京日本学研究中心 専任講師
- 2001年11月 香港大学大学院博士課程修了 Ph.D.

著書・論文等

The Care of the Elderly in Japan, RoutledgeCurzon Press, 2004

「プチブルの暮らし方：中国の大学生が見た日本のドラマ」（中野嘉子と共著）

岩淵功一編『グローバル・プリズム－日本テレビドラマと東・東南アジアの都市現代』平凡社、2003年

「日本社会の一致・調和主義モデルへの一考察：寿老人ホームにおける衝突を例にして」北京日本学研究中心編『日本学研究』13号、世界知識出版社、2003年

「デジタル・ファストフード：中国若者の目で見えた日本のテレビドラマ」北京日本学研究中心編『日本学研究』12号、世界知識出版社、2003年

「キムタクと魯迅－中国の大学生が見た日本のドラマ」（中野嘉子と共著）『外交フォーラム』2002年10月号 No.171

“Speaking of Life-Interviews of People Living and Working in a Japanese Welfare Institution,” *Intersections: Gender, History & Culture in the Asian Context*, Issue 6, Murdoch University, Australia, 2002

「日本中年期夫婦における夫婦関係の満足度－三菱銀行中間管理層夫婦に対する調査を中心に」北京日本学研究中心編『日本学研究』7-8、世界知識出版社、1997-1998年

はじめに

最近、日本では「韓流」^{ハングワウ}と呼ばれる韓国エンターテインメントは非常に人気がある。新作映画の公開はもちろん、「冬のソナタ」を初めとするテレビドラマも次々とNHKBS2で流れている。「冬のソナタ」²で一気にスーパースターとなったペ・ヨンジュンは「ヨン様」と呼ばれ、多くの中高年女性の心を掴んだ。ヨン様は電通が行ったインターネット調査「消費者が選んだ二〇〇四年上半期の話題商品ベストテン」の第四位となり、彼は大塚製薬「オロナミンC」、ロッテ「フラボノガム」と「マカダミアチョコレート」、SONY「ハンデイクム」、ダイハツ「ミラ」、KDDI au「グローバルパスポート」などのテレビコマーシャルに出演するなど、日本のテレビや雑誌に引っ張り風となつてゐる。一方、韓流には負けまいという勢いで、映画や流行歌をはじめとする香港のポップカルチャーも日本に進出してゐる。昨年末、梁朝偉（トニー・レオン）、木村拓哉、章子怡（チャン・ツイイー）、王菲（ウオン・フェイ）といったアジアのスーパースターの豪華共演を実現できた王家衛（ウオン・カーウアイ）監督の香港映画『2046』が日本で初公開された。中国のエンターテインメントと言うと、張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『英雄』に続き、章子怡、金城武、^{かねしる存し}劉徳華（アンディ・ラウ）をキャスト

とするアクション映画『ラヴァーズ』も大いに日本で受け入れられた。そして、中国の古典楽器に西洋的ポピュラーミュージックを融合させた「女子十二樂坊」は二〇〇三年から連続二年間日本で演奏会を開き、日本中に旋風を巻き起こした。これらの現象を考えてみると、どうもアジア漢字文化圏のメディアとポップカルチャーの交流は、非常に顕著になっており、アジア全体の文化向上のためにそれぞれの国と地域はお互いに協力しているように見える。かつて、ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』（一九八三³）の中で国民国家という共同体は活字メディアと国語の普及により作られたものだと指摘した。現在、映画、テレビや衛星放送、CDやDVD、インターネットといった新しい視聴メディアは、あたかも地域共通の「汎東アジア文化」⁴とも呼ばれるものを生み出しているようである。

このような流れの中で、日本のポップカルチャーはアジア地域においてどんな影響力を持っているのか、地域の文化向上にどんな役割を果たしてきたのか、そしてなぜ広く消費されたかについて、今日は、主に一九九〇年代半ばから二〇〇二年まで中国でヒットした日本のトレンディ・テレビドラマ（通称「日劇」）を例にして、日本の文化商品を消費する一つの主力である中国人大学生の声を交えながら、分析していきたいと思う。ここで用いるデータは、主に中国における日本大衆文化の受容に関心を持つきっかけを

与えてくださった香港大学の中野嘉子博士と共に、二〇〇一年から二年にかけて北京、南京、上海、蘇州で行ったインタビュー調査の結果である。今日のお話も二人の共著の論文「プチブルの暮らし方―中国の大学生が見た日本のドラマ」⁵⁾をベースにしている。ここで取り上げる例は、経済発展の著しい江南地域の都市部に住む大学生のことであるから、彼らの日劇に関する考え方や日本観は中国の一部の大学生の声しか反映できていないことを敢えて強調したい。私のお話を聞いていただき、日本大衆文化の海外での受容の現状や、一九九〇年代以降の中国の急激な社会変動を少しでも理解してくだされば幸いに思う。

一九九〇年代初期、中国の計画経済システムが全面的に市場経済に移行するにしたがって、大都市では外資系のデパートやスーパーマーケットが次々とオープンし、その豊富な商品、多彩な陳列法、そして明るいショッピング環境が中国人の目を丸くさせた。ケーブルテレビ、衛星テレビネットワークの実現やマスメディア産業の発展は、中国人が海外の映像を見るチャンスを増大させた。スイッチを入れれば、外国の人々がどんな日常生活をしているのか、画面上でいつでも見られるようになった。こうして外国人との暮らしの違いが目に見えるようになった一九九五年三月に、上海東方テレビ放送局は中国語版の日本テレビドラマ『東京ラブストーリー』⁶⁾(図1)を放送し、大ヒットさせた。



図1 『東京ラブストーリー』



図2 日劇紹介のカタログ本

これをきっかけに、日本のテレビドラマは中国の都市部若者の間で人気を集めた。ここで言う日本のテレビドラマとは、一九八〇年代後半のバブル絶頂期に制作し始め、そして一九九〇年代に入ってからバブル崩壊を背景に、フジテレビ、TBSなどの民放テレビ局が制作した東京の若者の都市生活を描くトレンドイ・ドラマやポスト・トレンドイ・ドラマのことを指す。二十代の人気アイドルが主役であるから、中国では「日本青春偶像劇」と呼ばれ、また「日劇」(図2)とも略称される。これはテレビがまだ普及していなかった一九八〇年代(千人に一台)の頃に、中国全土でヒットした日本のテレビドラマとは全く違うタイプで、主に台湾や香港でのブームを受け次第に中国の都市部若者の間に浸透してきたものである。

一九八〇年代の人気日本テレビドラマというと、主に四つある。第一は、テレビ番組の不足を埋めるために海外の番組を輸入し始めた八十年代初期に、上海電台によって中国語

に吹き替えられた『姿三四郎』である。次のヒット作は、日本女子バレーボール選手の戦う姿を描いた『サインはV』である。三番目は、一九八四年に放送された山口百恵の『赤い疑惑』である。当時、このドラマの放送時間になると、皆一目散に帰宅したり、テレビのある親類や友達の家が集まったりして、町中の道路が閑散となったという人気振りだった。四番目のヒットドラマは『おしん』である。これらの人気ドラマに共通する特徴は、いずれも各年齢層を越えて注目を集めるホームドラマであり、伝統的な家族生活、家族愛、人間関係、若者の純情、誠実な愛情、日本人の勤勉さ、忍耐強さ、残酷な運命と戦う精神などを描くものが多かったのである。

一、なぜ日劇が面白い？

等身大の物語、リアルな話

では一九九〇年代半ば以降の日劇は、一九八〇年代までの日本テレビドラマとどんなところが違うのだろうか。それは、主に視聴者層が十代後半から三十代半ばまでの若者向けの恋愛ドラマという点で大きな違いがある。北京、南京、上海、蘇州などでインタビューをした時、大学生たちは皆楽しそうに『東京ラブストーリー』『ロングバケーション』

ヨン』『GTO』などのことを語ってくれた。彼らにしてみれば、日劇の魅力はストーリーの面白さ、キャラクター、ドラマの魅力を高める制作技術（テーマソングとバックグラウンド音楽、行き届いた細部描写、繊細な心理描写などの非言語効果の使用）、適切な長さ、文化的近似性（容姿、感性、愛情表現、人間関係）などの要素である。

しかし、中国の現代化した都市地域に暮らす若い学生たちが最も共感を抱いたのは、日劇の中に映った中国国内のテレビ番組にはないリアルな等身大の物語、つまり自分と同じ年齢の異国の若者の大都会での恋愛模様、友情、仕事、暮らしぶりなどである。例えば、二〇〇一年に南京の東南大学で調査をしたとき、コンピューター・サイエンス専攻の大学三年生王浩君は、『東京ラブストーリー』を見た後の感想を次のように述べてくれた。

完治は日本の会社に勤めているごく普通のサラリーマンでしょ。僕らもあと二、三年で彼のような会社員になりますよね。そうすると彼の身の上で起こった恋愛物語は僕の上でも起きるかもしれないし、僕の周りの人々にもあるかもしれない。⁽⁷⁾

上海同済大学で力学を専攻し、夜は繁華街のパブでピアノを弾いて月に二万元の高額

なアルバイト代を稼いでいる四年生の陳傑君は、福山雅治と常磐貴子主演の『めぐり合い』を四、五回も見て、心がゆさぶられるほど感動したという。

このドラマが僕に深い印象を残してくれたのは、とても自分の生活に似ていて、これまででない共感を覚えたからです。…中でも福山雅治が演じる役に最も共感します。彼は建築エンジニアですが、僕の専攻もそれに近い。彼は撮影が好きなので、卒業後建築関係の仕事に就かず、アルバイトをしながら、写真を撮ったりして、撮影の勉強をしていました。つまり、職業を選択することや、理想の仕事と現実生活の関係を処理することにおいては、このドラマは僕と共通点がありますね。僕も時々音楽を自分の職業にするかどうか迷っています。ですからこのドラマを見たとき心が痛みました。人間は自分の道を選択する時はとても迷ってしまいますね。

陳君は結局高給取りの方を選択し、今も徐家滙にある台湾人経営のパブでピアニストをしている。彼のこの証言は、日劇のリアリズムが若い視聴者を惹きつけ、彼らに感情移入を引き起こさせたことを示唆している。

ドイツとの教育や文化交流が盛んな上海同済大学でコンピューター・サイエンスを専

攻めている銭勇君は、日本の若者のライフスタイルに目を向けている。彼は次のように語ってくれる。

彼らは狂ってるほど仕事をしてるね。週末も残業をする。大企業は High-rises がいくつもあったね。日本人は水を沸かさずに直接蛇口で飲む。彼らの冷蔵庫はでっかいね。スラム街に住んでいる人もいるが、金持ちはみんな高級マンションに住んでいる。『ラブ・ジェネレーション』でみたら、日本人はセックスに対してとても開放的でね。夜遅くまで外で生活をしてる。男女デート用の専門ホテルさえあるし：

ドラマの中の暮らしぶりが若者に注目される点は、戦後日本の『朝日新聞』に掲載されていたアメリカのマンガ『ブロンディ』が日本人に受容された頃の状況を連想させる。当時の日本人にとって、電化製品に囲まれたアメリカ人の便利で豊かな家庭生活は夢のようだった。中国の若い学生たちの目に、「衣食の心配がない」日本の若い男女が送っている自由で充実した豊かな都市生活と美しい恋愛物語は夢のように映る。

若者ドラマの欠如

一九九五年に『東京ラブストーリー』が放映されるまで、中国には若者個人に焦点を当て、彼らの学園生活や恋愛模様、仕事などを描いた等身大のドラマはほとんど制作されていなかった。

中国では長い間、テレビドラマを娯楽ではなく教育メディアとして捉えてきたから、共産党のイデオロギー的な要素が強く出てくる。新中国誕生とその発展の歴史や、社会主義建設の業績、改革開放の著しい成果を題材にするドラマは、キーノート・ドラマと違って、国家のプロパガンダのような役割を果たしている。娯楽としての主力ドラマには、時代劇がある。清朝の宮廷を舞台に、清廉潔白な官僚と貪欲な悪徳官僚を対照的に描くことで、実際は現代の政治腐敗を風刺している宮廷ドラマは特に人気がある。香港の作家金庸、古竜の原作に基づいて制作した、日本で言う剣豪ドラマも人気がある。

もっと身近な題材のドラマというと、主に都市と農村の住民の家庭生活を描くホームドラマや、「改革開放の問題点」とされた浮気、失業、犯罪などのことを扱ったドラマがある。どれも内容が切実で、若い人々に夢をかせるようなおとぎ話ではない。

主義主張のない娯楽映像というと、香港、台湾などの華人社会の映画・ドラマ、そしてハリウッドと日本のものがある。恋愛ドラマは、一九八〇年代の後半から香港、台湾、

シンガポールのものが放映されてきたが、これも日米のアニメを見て育った世代には物足りなくなる⁽⁸⁾。というのは、これらのドラマは、往々にして金持ち一族の話で、家柄の格差がモチーフで、若い世代のラブストーリーに親世代の葛藤が織り込まれ、幾組かのカップルが登場し、主人公の年齢設定も少し高い。話の展開が複雑だから、延々と四十話以上続いてゆく。親が姿を見せない一人暮らしで、恋愛そのものをテーマにし、その過程におけるさまざま喜びや悩みを繊細に描写するものは稀だった。

そこへ、織田裕二演じる田舎ッ子の永尾完治が、鈴木保奈美演じる都会ッ子の同僚赤名リカと恋に落ちる『東京ラブストーリー』が放映され、大当たりしたのである。

突然、こういった種類の日本製トレンディ・ドラマが出てきて、描いている主人公は自分たちの年齢と大体同じで、ストーリーはまた身の回りでおきる可能性のあるラブストーリーですから、みんな興味津々でしょう。(上海 大二女子 経営学専攻 二〇〇二年夏)

中国の若者には、東洋の隣国の大都会にいる同世代の主人公たちが繰り広げる恋愛物語が新鮮に映った。

ハリウッド映画は、一九九五年から年に一〇本輸入され、中国語に吹き替えて上映されるようになり、香港映画と共に中国の娯楽映像の主流となっている。しかし、ハリウッド映画と日本のテレビドラマとを比べると、上海外国語大学英文科の二年生で、学内放送のDJをしている陳偉君は、「たとえば両親が映画で」ヨーロッパ系の人を見てみると、非常に自分とは遠いなどという感じすると思う。つまり動物園でも見ているような感じ。日本人を見ていると、お互いに似ているという気がします。みなアジアの民族ですから、感情面が理解しやすいし、彼ら（ドラマの人物）が何を考えているのか理解できるところから」と、文化と感性の類似性から日劇の受け入れやすさを語ってくれた。

二、日劇の流通パターン

日劇の人気は中国ではまずテレビ放送で定着し、次第に海賊版VCD(ビデオCD)、そして構内ネットワークやインターネットカフェに接続するパソコンでの視聴へと消費のパターンが個人化していく。

テレビ放送

一九九一年にフジテレビで放映された『東京ラブストーリー』などの日劇は、越境放送のスターテレビでの放映によってすでに台湾・香港・シンガポールなどで大反響を呼んでいた。その影響で、日劇の人気は一九九〇年代の半ばに、上海という国際大都市で爆発的にヒットした。一九九五年三月に中国語に吹き替えられた『東京ラブストーリー』が上海東方電視台により放映された。このドラマはその後すぐ北京と地方都市のテレビ局からも放映され、全国的に好評を博した。この結果を踏まえて、中国各地のテレビ放送局は、質の高い日本ドラマを導入し始めた。

日劇は、中国国内のテレビで放映される場合、まずテレビ放送局で中国語に吹き替え、直轄市や省レベルの地方テレビ局、もしくはケーブル・チャンネルで放映される。中央電視台や衛星チャンネルのネット放送網を通じて全国的に放映される場合もある。しかしなんとといっても中国における日劇の普及は、上海の各テレビ局による放送に負うところが大きい。例えば上海電視台十四チャンネルの「白蘭氏劇場」は、上海各テレビ局から中国語字幕つきで原語による外国の映画とドラマを放映する番組である。一九九七年から、この「劇場」は普段勉強に忙しい学生のために、日本のテレビドラマの番組に倣って、「日曜劇場」と銘打った時間帯を設け、中国語字幕付きで日本語のドラマを

そのまま流す番組を作って、毎回二、三話の日劇を放映してきた。青少年を対象にする上海教育電台も、二〇〇〇年より毎夕六時から七時までの一時間を「青春劇場」とし、主に日本のドラマを放映してきた。上海東方電台は、平日の連夜、いわゆる帯番組で日劇を放映していた。一九九〇年代半ば頃から二〇〇二年まで、上海で放映された日劇は、『二〇一回目のプロポーズ』『一つ屋根の下』『理想の結婚』『Beautiful Life』など、五十作品を超えていた。

しかし放送・映画・テレビを管轄する国家広播電影電視総局は、地方テレビ局やケーブルテレビ局による外国ドラマの放映数が増えるに多いことは、国産テレビドラマの放映や制作事業の発展にとり不利になると判断し、二〇〇〇年より規制強化に乗り出した。二〇〇〇年一月四日付けの通知によると、「国産テレビドラマを繁栄促進させるために、午後六時から一〇時までのゴールデン・アワーには、海外のドラマの割合を一五パーセント以内とする。午後七時から九時半までの間では輸入番組を放映してはならない」と定めている（国家広播電影電視総局 二〇〇〇年）。この規制の影響で、二〇〇〇年からゴールデン・アワーには、日劇を真似た上海や北京を舞台とする国産アイドルドラマが大量に放映され、そのおかげで日劇の放映は数が減った。さらに二〇〇一年頃には韓国ドラマをはじめとする韓流ブームが北京から起き始め、韓国ドラマが日劇に取って代

わるようになった。そのために今やテレビ放映による日劇の本数が激減した。

日劇は、香港ベースの衛星テレビ局であるスターテレビの中国語チャンネル・鳳凰衛視中文台によっても放送されている。鳳凰台の日劇も中国語への吹き替えであるが、字幕には香港や台湾で用いられている「繁体字」が当てられている。鳳凰台の訳は、国内の訳より笑いのセンスがいいと学生たちは高く評価するが、受信には衛星テレビのパラボラアンテナかケーブルテレビが必要なので、すべての家庭で受信できるわけではない。外国語大学以外、普通の大学の寮では鳳凰台の番組は映らないことが多い。また広東省に限られたことであるが、香港の地上波テレビ局TVBとATVの番組が受信できるから、香港の広東語に吹き替えられた日劇が流れている。

海賊版VCD

中国の大学生は学期中、ほとんどテレビを見ないのは勉強が忙しいからである。自宅通学はきわめて稀で、在学中は大学内で四人から六人が一部屋の寮生活をしている。ほとんどの部屋にはテレビがない。千人の学生が暮らす寮に、管理係事務室のテレビが一台だけということも珍しくない。息抜きは、週末の映画鑑賞あるいはコンピュータでの映像視聴ということが多い。

そこへ現れてきたのが、海賊版VCDである。VCDは中国や香港では主流で、画質はそれほどよくないが、値段がやすい上、VCDデッキやパソコンがあれば手軽に再生でき、時間的制約もないから、普段勉強で忙しい高校生や大学生、若い会社員には歓迎されるメディアリソースである。最新の日劇をテレビで見逃した人はたいいてい海賊版VCDでそれを見る。中国では一九九七、八年頃から、日劇VCDが流通し始め、一九九九年から二〇〇一年にかけてブームはピークを迎えた。現在はDVDに取って代わられている。

二〇〇一年の日劇ブーム最盛期には、日本でヒット作の放送が終了するとすぐこれに繁体字の字幕がついて、数週間うちに大都市のビデオ店や露天商にVCD数枚の入ったボックスセットで現われた。全編の値段は、たいいてい五〇〜七五元（およそ七三〇〜千円）である。二〇〇一、二年の時点で、上海最大のレンタル・ビデオチェーン店・美亜音像租賃連鎖店には、日劇の五十タイトルが整然と並んでいた。海賊版VCDは、大都市だけではなく地方都市のビデオ店にも現れた。蘇州の町中のビデオ店には、三〇タイトル以上の日劇が、流行りだした「韓劇」と共に店内の一番人目の付く場所に置かれていた。旧日本帝国陸軍の駐在地であった南京理工大校内のレンタル・ビデオ店にも、日劇がほぼ四〇タイトル置かれ、一話が一日二元（およそ一四円）で貸し出されていた。

こういうVCDは国営の新華書店やスーパーでは『日本経典「名作」テレビ連続ドラマシリーズ』という企画化されたボックスセットで販売されており、日本にはVCDという映像商品がないことも知らないから、中国人はほとんど自分の買った、あるいはレンタルしたVCDが海賊版であることを知らずに、正版として消費している。

大学生はVCDを主にレンタルする。普段勉強に追われているので、週末や休暇中にVCDを全編借りて、数日のうちに十数時間のドラマを最終回まで見終わる。私が属する北京日本学研究センターの学生のクラスに、次のような逸話があった。朝一〇時に始まった「日本社会文化論」の授業中、日本人の先生が『東京ラブストーリー』を持ってきて学生に見せたところ、あまりにも面白かったので、一二時に授業が終わっても、誰も食事に行かず、夜の九時までずっとドラマを鑑賞していた。つまり、日劇のマラソン観賞はすっかり定着していたのである。

VCDの観賞は、自宅ではVCD再生機で、大学であれば、主にコンピューターによることになる。特にデジタル技術の発達によって、ワンクール一、二話のドラマを一、二枚のMP3E格式(図3)に圧縮したソフトも出てきた。このソフトはコンピューターで見ることが出来ない。一〇元(約一四円)で一枚を買えば一つのドラマが見られるから、学生にとっては一番買い得のようである。

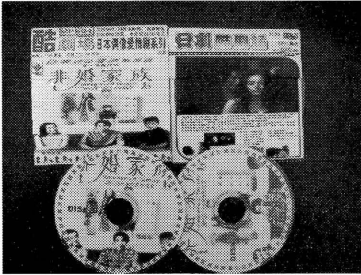


図3 MPE形式の日劇VCD



図4 ファッション店の店頭に「DVD正版すでに入荷、はやく購入ください」と書かれた裏通りのビデオ屋の看板



図5 DVDのハリウッド映画



図6 DVDの日本映像

中国の経済発展のスピードがすこぶる速いことと同じく、中国の店舗の営業回転率もはやい。二〇〇二年に上海で調査したときに立ち寄った繁華街淮海路と同济大学近くの美亜音像租賃連鎖店は、今年（二〇〇五年）の初頭になると、すでに跡形も見つからなかった。政府が主導する海賊版ソフト取締運動のため、海賊版の映像は、

表通りの音像書店の店頭には置かれなくなったが、都市中心部の古い住宅地のファッション店や靴屋の裏手には小さいビデオ店が経営され（図4）、そこには、図5と6に示したようなハリウッド映画や日本の映画、ドラマ、アニメのDVD海賊版映像が販売されている。

ブロードバンドを通じての視聴

二〇〇二年頃から、ブロードバンドが普及し始めたおかげで、復旦大学、清華大学などの大学内はネット化された。構内がネット化されると、学生の娯楽生活のソースも多くなる。復旦大学「構内ネットワーク」では、これに繋がっているすべてのコンピュータは、お互いにソフト資源がシェアできるようにになっている。一―二台のコンピュータに日劇を保存しておけば、特定のドラマを見たい学生はネットワークに接続して、そのソフトをダウンロードすればいつでも見られる。この構内ネットワークが出来て以来、さまざまなルートを通じて最新の娯楽ソフトを手に入れ、ネット上でリソースを提供する熱心な「専門家」まで現れた。このような専門家のおかげで、二〇年前に中国でヒットした『赤い疑惑』などのドラマも大学キャンパス内で流通するようになった。アニメやテレビドラマに興味を持つ学生は、またネット上でTV版のサブ・ウェーブサイ

トを作って、特定の作品についての感想文を載せたり、人気ソフトを推薦したりして、情報を交換している。

ブロードバンドの普及によって、インターネット・カフェでネットを通じて日劇を見る学生も増えた。たとえば、蘇州では一時間二元（およそ二八円）でハリウッド映画や日劇が楽しめる。上海と北京でも大体同じ値段であり、随分安い。このように日劇の海賊版ソフトは、テレビの放送を待たずに早く、安く、手軽、しかも内容が新鮮という要素が揃っているので、共同研究者の中野嘉子博士は「デジタル・ファストフード」と格好よく命名した^⑤。こうして日劇の人気は、主にデジタル世代の若いエリート予備軍によって支えられていた。

日劇のヒットに触発されて、二〇〇〇年頃から日本のトレンドイ・ドラマを真似た韓国と台湾製の青春偶像劇が台頭してきた。例えば二〇〇一年には日本のマンガをもとに製作された台湾のドラマ『流星花園』は、毎日勉強しないで恋愛のことばかり考えている貴族的学生の学園生活を描いているため、親たちの要請により、テレビでの放送が禁止されたが、若者はVCDを通じて見ていた。先にも触れたように、二〇〇一年の半ばから、中国ではスターテレビによる韓国製ドラマの大量放送に先導され、韓劇を放送するブームが引き起こされて、日劇のヒットは次第に「韓流」に乗り変わって行った。し

かし、学生たちは、韓国の恋愛ドラマは生と死を主題にするものが多く、（リアルではない）（ストーリーの進展が緩やか過ぎて付いていけない）（家族関係が中国に類似しているから新鮮味がない）（自分たちはやはり日劇が好きだ）と口を揃えて言っていた。日本での『冬のソナタ』のような熱狂ぶりは、中国ではまず考えられないと思われる。

中国のドラマ制作者も、一九九九年頃から国産のアイドル・ドラマをつくり始めた。しかし、これらのドラマは、大学生の間ではあまり評判が芳ばしくない。たとえば図7の国産ドラマ『将愛情進行到底』と図9の『新聞小姐』は、それぞれ『あすなる白書』（図8）や『ニュース女』といった日劇のストーリーをそのまま下敷きにしたものである。しかもロケ地は普通の若者が行けそうもない高級な場所ばかりで、三〇、四〇代の中年男女が二〇代の若者のラブストーリーを演じるものだから（『新聞小姐』はまさにそうである）、「日劇クローン」とあだ名を付けられたり、データラメ物語と悪評されたりしていた。時間の関係であらすじの詳細な紹介は省略するが、国産クローン劇『将愛情進行到底』と日劇『あすなる白書』に共通する筋書きを見てみよう。女性主人公が、男性主人公との最後の仲直りのチャンスとして、「何時まで、どこそこで待っている」という言葉を友人を通してその男性に伝えて貰ったのだが、結局は事情があつて彼は約束の時間に来られなかったため、女性はいつも自分のそばで見守ってくれている別の男性に想



図7 『将愛情进行到底』



図8 『あすなろ白書』



図9 『新聞小姐』

いを傾けていく、というものである。また、『将愛情进行到底』のストーリーは中国の社会事情、価値観などにそって、ある程度修正されている。

たとえば、ラブシーンや同性愛のことは、国産クローンの中では姿を見かけない。とは言え、中国西北部の小さい町から上海の名門大学に入学した貧乏大学生の設定である男性主人公は、こんなお洒落な格好をしているはずがないと思われる。

台湾・韓国の偶像劇にしる、国産の日劇クローンにしる、日劇はトレンディ・ドラマの教祖である地位は揺るがないものであるようだ。

三、プチブル気分と日劇

次に中国で台頭してきた「プチブル」気分と日劇の関係を見てみよう。大学生の間で日劇がヒッ

トしたのは、一九九四年以降、市場経済導入と教育制度の改革によるキャンパス・ライフと大学生の将来像の変化とが関連するように思われる。就職制度の変化によって、進路の幅やライフスタイルの選択が広がり、大学生は自分の将来を夢見ることができるようになったにもかかわらず、生活の変化に見合った国産のソフトが「空白」であるため、海外のソフトで以てその空白を埋めたのである。たまたまそのソフトが「プチブル」気分にあふれる日劇であった。

プチブル（小資）の意味

では中国における「プチブル」、中国語でいう「小資」の言葉の意味は何だろうか。

ご存じのように、社会主義国家中国では、階級意識や階級などを論じることが長い間タブー視されていた。毛沢東時代には、階級は政治的理念に基づいて労働者階級、農民階級、知識人階級の三つに分けられていた。そしてブルジョア階級は無産階級を搾取る人民の敵であり打倒すべきものとされていた。

「小資」は元々小資産階級（プチ・ブルジョア）の省略的な言い方で、毛沢東の時代には、知識人とはほぼ同義語として使われていた。毛沢東にしてみれば、プチブル階級には両義性がある。すなわち、その中の青年学生は知識人で、政治感覚が鋭いから革命指

向性はある。しかし同時に、小資産階級の魂の奥には自由主義と個人主義の傾向が強くあるから、革命の対象でもある¹⁰。ゆえに、一九四〇年代の延安では、プチブル気分は共產党知識人の自己批判の対象だった。五〇年代後期、小資産階級は反共産党反社会主義の右派として処罰され、文化大革命の間は、都市部の知識青年は農村に追放され、肉体労働を通じて「再教育」を受けた。つまり「小資産階級」は「資産階級」と同じように政治的レッテルであり、革命群衆や社会主義と対立するという意味を持っている。そして「小資情調（プチブル気分）」は、取り除きたい精神として、無産階級の政治理念上においては一種の脅威となっていたのである。¹¹このようなコンテクストがあるから、一九九〇年代の初期になっても、「小資」というとまだマイナスのイメージが強くあった。

しかし、改革開放以来二〇年、中国は著しい経済成長を遂げ、階層構造にも大きな変化が生じてきた。とくに一九九二年に市場経済に移行して以降、中間階層（ミドルクラス）が形成され、「小資産階級」も生まれてきた。そのメンバーは大学卒の学歴を持つインテリ、各種の企業に勤めている若いホワイトカラー、都市の独身貴族、フリーランサー、自由度の高い新聞記者、編集者、芸術家などである。「小資産階級」になれる条件は、多少とも時間やお金があつて、個性的な文化趣味があるということだ。

中産階級とは、中国社会科学学院の『当代中国社会階層研究報告』¹²（二〇〇二年）の定

義によると、「頭脳労働を主とし、給料やボーナスで生活している。高い収入、いい職業、高い消費水準を有し、生活の質にはゆとりがある。一家の年収は、五万元から七万元（約七一万六千円から一〇〇万二千円）で、ライフスタイルについては、マンションと自家用車を所有し、定期的に旅行に出かける」という。普通の中国人にとって、「中産階級」という呼び方より「ホワイトカラー」のほうが馴染み深い。

こうした階層構造の変化に便乗して、一九九八年から社会階層や各層の生活様式、品位に関する大衆向けの本が続々と発行され始めた（図10）。たとえば、ケンブリッジ大学で博士号を取得した陳少珙は『階層』¹³という著作の中で、イギリスにおける社会階層と生活様式の分析をもとに、九〇年代中国の階層意識と各階層の行動パターンを描いている。『新週刊』では、マイカーを所有し、犬の散歩をする家政婦つきの都市部「中間階層」の主婦、モーターバイクに家族をのせて出かける四川省のある小さい町の「中間階層」家庭のイメージを紹介している（図11）。

さらに二〇〇一年七月一日、江沢民は社会階層や、社会移動の実践について発表した。彼は私営企業主（資本家）の大部分も社会主義の建設者で、その中の先進分子は共産党に加入してもかまわないと指摘した。この「七一講話」をきっかけに、資本家を異端視、階層意識をタブー視する時代は終焉を迎えた。



図10 階層や階層意識にまつわる書籍



図11 中国の「中間階層」(『新週刊』)

同じ時期、もう一つ注目される光景がある。それは、大都会上海で流行り出した一九二〇、三〇年代の旧上海への懐旧ブームである。この懐古趣味を代表するいくつかの現象を見てみよう。まず、一九四〇年代のベストセラー作家、清末の名官僚・李鴻章の曾孫に当たる張愛玲の小説ブームがある。張は上海や香港を舞台に『傾城の恋』などの人気恋愛小説を多数書いたが、中国で言う漢奸文人（民国時代汪精衛政権の親日派）と結婚したことや、香港に移住してから反共産党の作品を書いたため、一九九〇年代初期まで彼女の作品は大陸で出版を禁止されていた。しかし海外では張愛玲の文学に対する評価は高く、香港映画に対する彼女の影響も強いため、一九九〇年代半ば頃から中国大陸でも彼女の文学作品を現代女性文学集に収めるという見直し傾向が現れ始めた。張の小説に現われる旧上海のエキゾチックな雰囲気、モダン女性のファッショナブルな生活、洒落たライフスタイルは、二〇〇〇年に出版されたハーバー



図12 『良友画報』の表紙

ド大学教授李欧梵の中国語版著作『上海摩登』の評判で、再び注目された。改めて張愛玲は戦前のプチブルの代表と見なされ、彼女の小説に登場した広告やチャイナドレスを研究する人さえ出てきた。李欧梵の研究する上海は、租界時代の上海、一九二〇〜四〇年代の西洋化したオールド上海で、そこには、映画館、建築物、デパート、広告の中のモダンガール、ダンスホール、カフェなどに象徴されるモダニティがあつて、「新感覺」派の作家たちや張愛玲の「プチブル」ムードがある。また二〇〇二年に、一九三〇年代に旧上海の大型総グラビア雑誌『良友画報』(図12)の編集を担当した馬国亮が、『良友懐旧』という本を出版し、古写真を以て旧上海の繁栄と華やかな都市消費文化を再現した。上海育ちの現代中国女性作家・王安憶や陳丹燕も、旧上海の資本家や中産階級の生活を活かしく思い起こす小説やエッセイを著している。文壇の上海懐旧ブームに煽られて、上海のテレビ局は「プチブル」作家張愛玲、鴛鴦胡蝶派作家¹⁵・張恨水、現代女性作家・王安憶などの原著に基づいて、旧上海の資本家大家族をめぐる家族関係、恋愛、商業競争などの海派ドラマを多く制作し放映してきた。このようにメディアの生産により、一九九〇年代から始まった旧上海の懐旧ブームは、二一世紀の初期にピークを迎えた。

二〇〇一年の夏、私が中野さんのリサーチ・アシスタントとして上海を訪れたとき、コーヒーを飲むために繁華街淮海路の喫茶店に何軒か入ったことがある。いずれの店も一九二〇、三〇年代の雰囲気味わえるように内装しており、壁にはファッショナブルな「モダンガール」のポスター広告絵や旧上海町並みの写真が貼られ、当時流行していた蓄音機、電話機などが置かれていた。たとえば、図13は英米煙草会社の哈徳門というブランドの紙巻煙草の月份牌「絵入り広告付き曆」のポスターで、高級そうなイアリング、指輪と腕輪をしている端麗な若奥様が精緻に細工された煙草入れをもつて、誰かに煙草を勧めようとするポーズを取っている。彼女が着ている半袖の襟、袖、ふちの模様は、当時シャネルのファッションで使われたアールデコのデザインのような。彼女は明らかに裕福な上流階級の出身であろう。図14のチャイナドレスのパーマ美人は、日本の化粧品メーカー中山太陽堂の双美人白粉、クリーム、石鹸、歯磨きなどの商品を宣伝している。国産化粧品・美容商品を生産する大中華化学工業社が作った月份牌広告絵の中で、洋式ガーデンの中で洋犬の散歩をしているファッショナブルな若い主婦の姿を描いている(図15)。このイメージはいかに前述の写真に示された犬の散歩をしている今の都市部中間階層の主婦に類似していることだろう。図16の月份牌広告絵は、パーマをかけハイヒールを着用する女性を描いていると同時に、洋風の室内スペース、モダンなイ



図13 英米煙草会社の煙草ポスター
哈德門
釋英画室 一九二〇年代



図14 中山太陽堂の化粧品ポスター
双美人・クラブ白粉
一九三〇年代



図15 大中華化学工業社の化粧品ポスター
吳志広
一九三〇年代



図16 あるイギリス商社のポスター
商品：カーテン生地
一九三〇年代

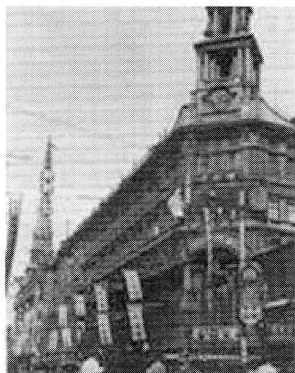


図17 百貨店大新公司

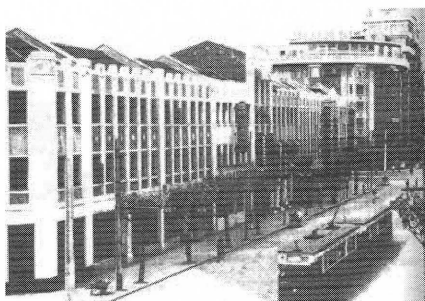


図18 ファッション名店街霞飛路



図19 三井ガーデン（旧三井物産所有）



図20 一九三〇年代風の居間

インテリアをも強調している。図17は、旧上海の南京路にある四大百貨店のひとつ、大新デパートの写真である。図18は、一九二〇、三〇年代のファッション名店街霞飛路（今の淮海中路）の様子を示す写真である。図19は、当時上海に進出していた日本商社・旧三井物産が所有していた三井ガーデンである。自分の趣味やス

テータスを示すために、現在の上海新中間階層は、古董品店から一九三〇年代の中・上流階級家庭に使われていた家具を買い集め、マイホームを品位のある洋風なものにしようとする（図20）。

一言で言えば、一九二〇、三〇年代の月份牌広告絵に象徴された、西洋風の美意識やデザインを取り入れ、チャイナドレスを着たモダンガールのイメージ、さらに洋楼、ガーデン、洋犬、洋風な室内空間などに代表されるブルジョア的なライフスタイルは、現在の中産階級、資産階級のイメージと重なるところが多いと言えよう。私からみれば、旧上海に対するこの種のノスタルジア・ブームは、過ぎ去った繁華、モダンテイへの追想というより、むしろ余裕ができた現代中国人の、よりよい生活、品位のあるライフスタイルを勝ち取りたいという欲望の象徴だと思われる。資本主義の復権でもあるといえるだろう。

こうした情況の下で、二〇〇一年に「プチブル」は全くプラスイメージの流行語として使われるようになった。現在では、プチブルは二重の意味を持っている。人の生活様式や趣味を指す場合は、個性的な都会のライフスタイル、文化的趣味や娯楽のことで、人を指す場合は、主に以上のものを持ち合わせた都会の若者のことである。

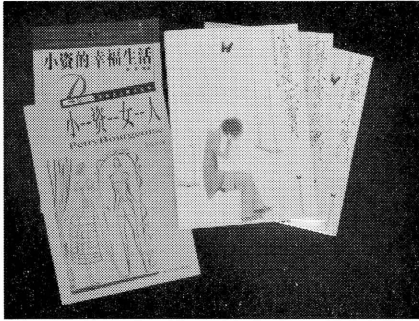


図21 プチブルのライフスタイルを紹介するカタログ本

日本のテレビドラマとプチブルのライフスタイル

プチブル・ブームの中で、プチブルのライフスタイルを紹介するカタログ本も次々と出版された(図21)。たとえば『小資女人』という本の中で、作者の黄海波は、プチブルが見なければならぬ映像ソフトとして日劇を挙げている。彼女によれば、

『東愛』は、プチブルの間で使われる日劇『東京ラブストーリー』の愛称だ。プチブルたちは、これまでの自分の生活で、「すてきな体験欠乏症」と「恋愛欠乏症」であったため、日劇でそれを埋め合わせている。彼らは美しい恋をすべき時、なにかとプレッシャーの多い生活をしてきたから、純粹に美しいというわけにも、心身ともに恋に捧げるといいうわけにもいかなかった。しかし、日劇の中では、恋愛が一大プロジェクトだ。生活の細かいこと一つ一つにまで美しさがゆき渡っている。日劇はおしゃれで、温かく、普通の人にも模倣できる要素に富んでいる。

岩渕功一（岩渕二〇〇一）が、台湾では日劇は「使用可能なイメージ」として消費されていると指摘した¹⁶。中国でも同様である。ただし手本となっているのは、主人公の暮らし全般である。これについては後にもう一度触れよう。

キャンパス・ライフと大学生将来像の変化

一九九四年の大学教育制度改革まで、大学生は自分で将来の進路を決めることができなかった。国が一貫して大学生の募集から卒業までを管理していた。大学は国家幹部候補生の養成機関であるから、学費は無料だった。そして就職は、国が学生を就職先に割り当てる「分配」制度を実行していた。就職先は学生が自分で探したり、選んだりするものではなかった。

居住地の移動も規制されていた。中国には出身地による都市戸籍と農村戸籍という戸籍制度がある。農村戸籍の人は大学進学と入隊によって、幹部になり都市戸籍に変更する以外、一生農村で生活しなければならない。上海戸籍の人が北京の戸籍に変わるとは容易ではなかった。大学進学の場合、地方出身の学生は故郷の戸籍を持ってきて、学校側の集団戸籍に登録し統一的に管理される。就職の「分配」の際には、北京には何人、上海には何人、南京には何人が就職できるという定数の割当てがあった。分配システム

のもとでは、「又紅又専」の学生、つまり成績が優秀だけでなく、政治的にも共産党を支持する先進分子の学生党员や共青团員は有利だった。地方出身の学生の夢は、卒業後に大都市の戸籍を取得し国営企業に勤めることだった。国営企業に就職することは、当時の学生にとっては「鉄飯碗」（鉄のお椀）、すなわち一生の保障が得られたのである。一九九〇年初頭には、給料のいい外資系企業に勤めたいと思っても、地方出身者にはできなかった。というのは外資系企業には、従業員のご郷の戸籍を企業所在地の戸籍に変更する「指標」の割り当てがなかったからである。

一〇年、二〇年前の大学生にとって、上からのコントロールの対象は将来の進路ばかりではなかった。キャンパスには、政治補導員と呼ばれる教師がいて、政治学習から日常生活にいたるまで、全般的に学生の動向を把握していた。恋愛しても、分配制度が原因で、恋人同士が同じ都市に就職できるといふわけには行かなかったから、学生たちはひたすら勉強に励み、恋愛に陥らないように努力する。実際、一九八五年まで大学生の恋愛は禁止されていた。キャンパスでの婚前交渉は、カンニングや窃盗と同じ「罪」とみなされ、見つければ大学の掲示板に「退校」の処罰が貼り出された。北京大学などでは、婚前交渉の罪で退校の処分を受けた若いカップルが自殺に追い込まれた事件も発生した。婚前交渉どころか、当時はデートをしたくても行けるところは映画館と公園だけ

で、気楽に入ってゆつくりと二人の時間を過ごせる喫茶店もなかった時代であった。

二〇〇一年四月になって初めて教育部が、大学を受験する人に対して年齢と婚姻状況の制限を取り消し、大学生が結婚できるかどうか議論されるようになった。二〇〇一年一二月、武漢大学が「法律法規に違反しなければ、大学が学生の結婚申請を干渉しない」(二〇〇一年二月二日付けの『武漢晩報』)と、新中国史上初めて大学生の結婚を認めた。二〇〇四年五月一日、天津師範大学の二三歳の王洋が結婚式をあげ、中国最初の結婚した女子大学生となった。大学生のプライベートの生活は徐々に自由が利くようになった。

生活のカタログ

計画経済から市場経済に移行するにつれて、一九九四年以降のキャンパスは大いに状況が変わった。まず、就職口は大学から指定されるものから、自分で探すものになってきた。一〇年、二〇年前には学生が描く自らの将来像はほやけたものだったが、今は次第に実現も可能な夢に変わってきている。現在の大学生にとって、従来からの公務員、教師の職は、福祉待遇もよくなり「鉄飯碗」であるゆえ、希望の多い就職先である。また、外資企業のエンジニア、人事・広報担当、ハイテク・ベンチャー企業の創業者、欧

米の留学先で就職して駐在員として中国にUターンするなどは、将来マイホームやマイカーを所有できる中間階層に入る理想を成就できる職業である。

蘇州大学で観光学を専攻している大学三年生の呉美玉さんは、地元蘇州でいずれは観光産業の管理職になって、「中産階級のレベルまで到達」し、二〇万円の年収を獲得したいと宣言する。二〇万円という数字は駆け出しの大学教師の年収の一〇倍、中国社会科学院が規定した中間階層の収入の三〜四倍になる。そして、どうして中産階級になりたいかと問うと、呉さんは「中産階級の生活はゆとりがあつて、自分のライフスタイルをどうしたいとか、家の中にどんなモノを並べようかとか考えられるからです」と答えた。

一九九八年に中国では、持ち家政策が実施され、全国各地の都市部では、マンションの建設ブームに沸いた。生まれて初めて自分の家を所有する中国人ならば、それを住み心地のよいマイホームにしたい願望は強いだろう。そこで、インテリア内装ブームが起こり、外資系のインテリアショップも数多くオープンした。スウェーデンのインテリアショップIKEAは、上海や北京で特に人気がある。

前述の呉さんは日劇が好きで、レンタルビデオショップから海賊版VCDを借りて見ている。一番関心を持って見ているのは、登場人物の着ている服であり、それから若者

たちがどんな物を使い、またどんな遊びをするかなどの生活のレベルもチェックするという。『上海電視週刊』の調査によれば、スチュワーデスや美容師は特に化粧の仕方や髪型を日劇から学んでいるという。

つまり、日劇は中国では「東京のファッション、インテリア、消費財、音楽」の情報源であり、おしゃれのカタログとしての役割を担っている。日本の女性ファッション誌『Ray』は、中国軽工業出版社からも出版され、訳名は『瑞麗』である。誌面では日本の流行のアイテムを紹介しているが、一冊一八・八元（約二七〇円）の値段は決して安くはない。購読者は、経済力のあるホワイトカラーの若い女性に限られるだろう。中国には外国の出版物の輸入規制があるため、台湾や香港のように日本語版の若い女性向けのファッション誌『Non-no』などがどのコンビニでも買えるというわけにはいかない。そんな限られた東京ファッション情報の中で、日劇は流行のカタログとして見られていく。たとえば、日劇の粗筋、テーマソングを始めとする日本の流行歌を紹介する「J-pop 専門誌の『日之韻』『EASY』」は、日劇の人気俳優が劇の中で着用した服のブランド名、使っている携帯電話、着けている飾り物、よく行く場所など一々枚挙に遑がない。

蘇州大学で将来英語教師を目指して勉強している于宏偉君は、宮崎駿のアニメが好きで、日劇は高校生の時に受験勉強の息抜きとして見ていたという。彼にとって一番印象

深いのは、日劇の中の主人公たちの自由な暮らしぶりである。

日本ドラマに出てくる主人公の大半がホワイトカラー階層で、生活の上では相当の保障がありますね。経済的な基礎があるという自由が利くでしょ。(主人公たちは)生活面でかなり自由です。親の世代とのジェネレーションギャップも回避しているから、とても自由に見えます。若い人たちはそもそも自由に憧れているでしょう。

若い僕らもよく勉強して、将来いい仕事につけば、夢も見られるし、やりたいことまでできるでしょう。日劇はとて面白い出発点を目の前で見せて、未来への夢を膨らませてくれます。

この于君は、日劇のライフスタイルは「いわゆるはやりのプチブル気分」に溢れていて、上海や蘇州などの目覚しい発展を遂げた江南地域にはよく馴染むのかもしれない、と語った。

自由な恋愛…「女倒追男」、異性同居など

日劇の中の恋愛はとりわけ自由に映って見える。前述の『あすなろ白書』の中には、

若い男女が一晚を一緒に過ごすシーンが二回ほど出てくる。『東京ラブストーリー』の中でも赤名リカは、永尾完治からの初めての「好きだ」のお返しに、「ねえ、セックスしよう!」と直接に投げかけ、完治がリカの一人住まいのマンションに泊まってくいションがある。これについて、プチブル本の恋愛指南では、恋人と夜は一緒に過ごすけれど結婚には縛られないというのが「小資的婚恋方式」だと説いている。つまり、プチブルブームの二〇〇二年に新しいとされた自由な恋愛を、日劇では一九九〇年代初期にすでに演じてみせていたのである。

さらにこれらの作品は、女性主導の恋、つまり「女倒追男」の恋愛パターンを提示してくれた。男性が自分の好きな女性に愛を告白するというのは、通常のパターンであるが、『東愛』においては、都会ツ子のリカは、地方出身の完治を初めからリードする。しかし、最後には完治の彷徨の意志を理解し、彼の幸せを思いパツと離れていく。

上海で土木工学を勉強している凌奇君は、言うこと為すこと大胆なリカが好きで、国内のドラマにはない女性像だと言っていた。「リカは、女子学生より男子学生に与える影響が強かったと思う。このドラマを見て、かなりの男子学生が女子学生への見方を変えたよ」と言う。そして、もし現実の生活の中で、リカのような女性がいれば、自分も付き合うつもりでいる、と言っていた。

男女の新しい付き合い方は、日劇のセールスポイントだ。日劇の中には、自立した彼女、年下の彼氏、男女の友達の同居、同性愛など、様々な男女関係の話題を提示している。二人きりの自由なマンション生活に憧れたら、これをすぐに実行に移す学生もいる。

一九九八年の持ち家政策が実施されてから、中国の住居環境も少しずつ整いつつある。大学でも市場経済の影響で、学費だけでなく、学生寮の費用も徴収するようになったので、これまで四人から六人部屋という全寮制が、徐々に個室や二人部屋に変化していく。大学の掲示板や電信柱には、オフ・キャンパスの貸し住宅の広告がいっぱい張られて、経済的に許せば一人暮らしもできるようになっている。中国のマスコミによれば、最近大都市ではアパートを借りて同居生活を始める若い男女が増えていると言う。これらの男女は、きつと『ロングバケーション』の中で描かれた木村拓哉が扮する失意のピアニスト瀬名と、山口智子が扮する彼氏に捨てられたモデル南とが支えあう同居生活を見たことだろう。しかし去年の六月、中国教育部が大学生は校外でアパートを借りてはいけないという規定を各大学に通達した。大学生の生活は自由になりつつあるにもかかわらず、国からのコントロールはまだまだあるので、外国のドラマに映った自由な恋愛生活やライフスタイルは、真実の憧れとして都市部の若者の間に浸透してきたのである。

日本に憧れていますか

日劇のプチブル暮らしは、中国の若者にも実現できそうな夢というイメージを提示してくれる。蘇州大学に通う李暁君は、日劇の「物質生活の豊かさ」が目を引いたと言った。「日劇が流行ったのは）日本の工業が発達しているからじゃないかな。日本の今日は、中国の明日でしょ。僕たちが、彼らみたいな生活を送ることができる日がきつと来ると思います。一種の期待があります」と言う。

もちろん日劇は憧れの対象というばかりではない。中国の大学生にとって、日本の女子高校生や大学生が物的欲望や生理的悦びを満たすために実行する援助交際などは批判すべきことである。

そして、日劇に登場する職場の光景は一番意見の分かれるところだ。広々としたオフィスで働く日本のホワイトカラーの充実した仕事振りを楽しく見ている学生もいるが、日本のサラリーマンのような働き蜂にはなりたくないという学生もいる。上海生まれの李遠君は外国語大学で英語を専攻しているけれども、意欲的に法律の勉強もしている。一日中じっとしている仕事はいやで、広報やマスコミ関係の仕事が志望である。彼は次のように述べてくれた。

ボクは将来日本の会社に勤めることはないと思います。あまりにもモノカルチャーでつまらないから。こんなに広い場所が細かく区切られていて、毎日その一コマ一コマにたくさんの人が細工物みたいにはめ込まれてるでしょ。朝九時に出て夕方五時にあがる。それを七、八年間勤めてやっとマネージャーに昇進じゃつまらない。ボクはもっと挑戦的な仕事をしたいです。

そして日劇の暮らしに憧れるかというと、前述した『めぐり逢い』の中で福山雅治が演じる主人公の運命に感動した上海同済大学の陳君は「他人の家のモノはいくらよくても他人のモノです。日本がいくらすばらしくてもそれは日本のことです。ただ、日本が発展していく段階での経験は学ぶべきですね。でも学ぶべきことがあっても、日本と同じようになれないこともあるでしょう。自分は中国が日本のような発展国になってほしい」と言い、実にクールな見方を持っている。学生たちはそれぞれ自分なりの見方で、日劇の「合理」的で吸収すべき要素と、切り捨てるべき要素を見分けているのだ。

中日関係の展望

日劇はデジタル・ファストフードとして、海賊版VCDの形で中国の都市部若者の間

で広く消費されている。そうしたドラマを通じて映った現代的な日本、美しい愛情劇は、中国若者のステレオタイプのな日本像を少しずつ変えたり、彼らの反日感情を和らげたりする面も確かにある。例えば、上海、蘇州の大学生の中に、靖国問題に対して理解を示している男子学生がけっこういる。それは中国人が天安門広場にある人民英雄記念碑を参拝することと同じで、どこの国にも民族の英雄がいて、違う形で祭られているという意見だった。

近年来の中日関係は確かに緊張を強めている。中国人若者の日本に対する不信も確かにまだ根強い。これは去年のサッカー・アジアカップの試合で起きた中国人観客が日本チームにブーイングを浴びせ、日本人サポーターにごみや瓶を投げつける反日事件からも窺うことができる。中国の経済成長に伴って、若者のナショナリズム情緒はさらに高揚していくと思うが、一方、日本の生活文化、若者のライフスタイル、ポピュラー文化に対して好意を持っていることこそ、中日両国の新しい世代による相互理解の可能性も示しているのではないかと思われる。

注

(1) このハンリユウという言葉は私にしてみれば、中国発の言葉で、同じ発音の「寒流」という言葉をパロディにして作った言葉で、北の寒い国韓国からきた潮流の意味である。二〇〇一年ごろから北京などでは韓国のテレビドラマや流行音楽などをはじめとするポップカルチャーが人気を呼ぶようになった。

(2) 『冬のソナタ』に対して、多くの人がかつて一九七〇年代に日本で放送された「赤い」シリーズのドラマとの類似性を、つまり複雑な家族関係、出生の秘密、隠された過去、記憶喪失、そして不治の病気など、指摘している。この物語の型が、「冬ソナ」の固有のノスタルジックな感覚をもたらしたのであるという。

(3) ベネディクト・アンダーソン（一九八三年）著、白石さや、白石隆翻訳（一九九七）『想像の共同体—ナショナルリズムの起源と流行』NTT出版

(4) 毛利嘉孝編著（二〇〇四）『日式韓流—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』せりか書房 p.11。

(5) 中野嘉子・呉咏梅（二〇〇三）『プチブルの暮らし方—中国の大学生が見た日本のドラマ』岩波 岩波文庫（編）『グローバル・プリズム—〈アジアン・ドリーム〉としての日本のテレビドラマ』平凡社 p.183-219。

(6) 柴門ふみ原作の大人気コミックをドラマ化したもので、主人公・永尾完治と赤名リカを中心としたリアルな恋愛模様を描く連続ドラマである。一九九一年一月からフジテレビによって放送された。特にリカのストレートな恋愛表現は、現代女性の新しい恋愛のスタイルという評判を呼んだ。

主演の織田裕二と鈴木保奈美をはじめ、江口洋介、有森也実らが演じた等身大のキャストが共感を呼び、高視聴率をマークした。

(7) 中野嘉子・呉咏梅「キムタクと魯迅―中国の大学生が見た日本のドラマ」『外交フォーラム』二〇〇二年十月号 p.49

(8) Nakano, Yoshiko. 2002. Who initiates a global flow?: Japanese popular culture in Asia. In *Visual Communication* 1(2), p. 231-233.

(9) Nakano, Yoshiko. 2002. Who initiates a global flow?: Japanese popular culture in Asia. In *Visual Communication* 1(2), p. 243.

(10) 毛沢東（一九二六）『中国社会各階級的分析』『毛沢東選集』第一巻 北京：人民出版社

(11) 包曉光編著（二〇〇二）『小資情調―一個逐漸形成的階層及其生活品味』長春：吉林攝影出版社 p.26-28

(12) 陸学芸主編（二〇〇二）『当代中国社会階層研究報告』北京：社会科学文献出版社

(13) 陳少琪（一九九九）『階層・中国人的格調与階層品味分析』北京：大衆文藝出版社

(14) 一九二六年に上海で創刊された大型総グラビア雑誌。一九四五年に廃刊まで十七年間、中国の政治・経済・社会・文化・文学・広告・漫画などあらゆる分野の記事や写真を網羅している。この画報が創刊された一九二〇年代は東アジアで大衆消費社会とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、映画や百貨店などが登場する時期とも重なる。

(15) 中華民国初期から五四運動時期にかけて活躍した通俗文学のグループ。才子佳人の恋愛物語が多かったので、魯迅から「佳人が才子に恋をして、別れ難い思いで、柳の影や花の下にいて、まる

で一对の蝴蝶か鴛鴦のようだ」と評されたことから「鴛鴦蝴蝶派」と称せられるようになったという。上海で刊行された『小説叢報』（一九一四～一九一八）、『小説新報』（一九一五～一九二二）などの雑誌は、小市民的趣味に迎合した「鴛鴦蝴蝶派」の代表的な雑誌だといわれる。そのうち、一九一四年から一九二三年にかけて発行した週刊『禮拜六』は影響力が強く、その文学グループは「禮拜六派」とも呼ばれる。概して、鴛鴦蝴蝶派は趣味を重んじ、作品の基本傾向としては、時代精神から離脱しているとされる。つまり、この流派の文学的目的が、お茶や食事を済ませた後の暇とうさを晴らす目的に供するものだと見なしている。しかし一部の作品は、愛憎の区別がはっきりして、現実を反映し、市民階層において、比較的大きな影響力をもっていた。「鴛鴦蝴蝶派」の代表的な作家は徐枕亜、包天笑、周瘦鵬、程小青、張恨水などである。

(16) 岩渕功一(二〇〇一)『トランスナショナル・ジャパン』岩波書店 p.215

発表を終えて

この度、日文研フォーラムにおいて、私が2001年度の住友財団の助成を受け香港大学日本研究学系の中野嘉子助教授と一緒にいったインタビュー調査の研究成果を皆さんと分かち合うことができました、まことにありがとうございました。

まず、大勢の方々に聞きに来て頂いて、これからの中日関係の展望に関する質問やご提言をいただきましたことに対して感謝を申し上げたい。コメンテーターをお引き受けくださった山田奨治助教授は、自分の体験談を踏まえながら、映像でもって巧みにコメントをくださり、本講演に興味深い色彩を加えてくださいました。

また、講演の際に司会をしてくださったテモテ・カーン助教授、映像ファイルの作成に協力してくださった情報課の江種里榮子さん、研究協力課の松尾隆さん、喜多川千寿さんにもお世話になりました。

最後に、日文研で充実した研究生活が送れることに、多大なご協力やご支援をくださった研究協力課の奥野由樹子、佐々木彩子、山田プロジェクト室の岡屋純子、小川順子、図書館の方々、コモンルームの職員の方々に対して、心から感謝申し上げたいと思います。ご指導やご教示をくださった稲賀繁美教授、園田英弘教授、劉建輝助教授にもお礼を申し上げます。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p><small>KIM Uchang</small> 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p><small>リヴィア・モネ</small> Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p><small>カール・モスク</small> Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p><small>ヤン・シヨラ</small> Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p><small>キンヤ・ツルタ</small> 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p><small>ジョナ・サルズ</small> Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p><small>KANG Shin-pyo</small> 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p><small>GAO Wenhan</small> 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p><small>シュテファン・カイザー</small> Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p><small>スミエ A. ジョーンズ</small> Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p><small>リヴィア・モネ</small> Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p><small>Hiroshi SHIMAZAKI</small> 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顯陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫①	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫②	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫③	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫④	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑤	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑥	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑦	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

129	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10	L.I. Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⑩	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑫	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑬	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑭	14. 2.12	マシミアアーノ トマシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑩	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑪	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑫	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑬	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎔烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツイゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑪	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑫	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエーフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神が出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑬	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑩	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑪	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役の役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
⑫	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『齒車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑬	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」
⑭	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マック マレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑩	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (日文研 外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性フランス国立社会科学高等研究院教授」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯 成煥 「韓国から見た日本のお盆」 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員)
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—ロンドン大学 SOAS 教授」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2006年1月20日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

©2006 国際日本文化研究センター

■ 日時
2005年3月8日(火)
午後1時～3時

■ 会場
アーバネックス御池ビル東館

第三回 阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道

阿比西尼亞の文化の道